

私は、対話的態度は生きていくうえで理想的だと思っているし、できれば自分もこうありたいと願っている。しかし、その実践・実現において、納得できない点があり、対話は不可能だとさえ思ってしまう。それが私の立場である。

①どういう点で理想的か

「自分の気持ち至上主義者」は、自分のことが信頼できない。自分の基盤が、たまたまわきあがった刹那的な感情でしかないからだ。そもそも信頼とは、何か確実なものがあると思うからそうできるのだろう。「人間よりコンピュータのほうが信頼できる」と言うときは、「コンピュータのほうが確実に計算できる」と言っているように思う。ならば、人間において確実なものとは何か。それがあるから、人は、自分も相手も物ではなく人格として扱い、対話をするのだろう。「個性」は確実なものではなかった。「自分の中に信頼に値するものを見出している」という点において、対話は望ましいものである。

「ハーバード白熱教室」(NHK)の第7・8回で取り上げられたロールズには、賛成でなかった。「自分の才能をたまたま重んじる社会に生きる偶然性」を考慮するのはよい。「才能を行使して得られる便益が、自分にふさわしいと思うのはうぬぼれである」という考えも納得できる。しかし、「恵まれた者は、恵まれない者の状況を改善するときに、その幸運から便益を得ようとするのであれば、公正である」という主張を、所得や富だけでなく、機会にまで当てはめようとするのには耐えられなかった。才能や便益が欲しくて欲しくてたまらないのに恵まれなかった者、つまり「持たざる者」にとっては、恵まれたものの状況改善など、「ほどこし」と同じである。しかもその「ほどこし」は公正であるから、自分の妬みは、真に不当なものなのだ。それでも残る不当という気持ち・惨めさを隠すためには、より大きな声で、「みんな特別！対等！」と叫ぶしかない。妬みなどの悪感情をごまかさずに済むという点も、対話が望ましい理由である。

「われわれがある人に対して(ゆえなく)不快を覚え、ある人を(ゆえなく)嫌悪し、軽蔑し、ある人に(ゆえなく)恐怖を覚え、自分を誇り、自分の帰属する人間集団を誇り、優越感に浸る……という差別感情は、一誤解されることを承知で言い切れば一人間存在の豊かさの宝庫なのである」(中島義道著『差別感情の哲学』講談社 p 9)

②どういう点で不可能か

「ハーバード白熱教室」最終回で、サンデル教授は、決して合意に到れないような様々にある正義・善の考え方に対し、「社会利益のために無視するのではなく、耳を傾け理解しようとし、時に挑むこと。他者を深く考え道徳的に関与すべきである」と説いた。理想はそうであろう。しかし、ハーバードの学生なら、たとえ善と善が衝突するような苦しい場

合でも、他者を深く考えること（対話）は比較的簡単ではないだろうか。

「優れた資質を持つもの、あるいは賞賛すべき業績をあげた人が謙虚であることほど簡単なことはない。彼（女）はすでに多くの人によって賛美されているのであるから、そのうえ傲慢になる必要がないのである」（p 16. 17）

感受性を、ロールズの言う「無知のベール」で覆わないのに、優越感に浸らず相手の言葉を聴くこと・発言することは、不可能ではないか。もしできると言うのなら、それは、自らの傾向性に沿って「対話」（人の話に耳を傾けるふり）をしているということではないか。その限りそれは対話ではない。「対話ができることは社会的資質ではないから『高み』ではない」というのなら、この場合はどうであろうか。

「（善良な弱者は）傷つきやすく弱い自分にすべてを合わせてくれるように要求する。自分は他人をなるべく嫌わないように努力している。だが、それはひとえに自分が他人から嫌われたくないからだ。自分が人から嫌われると、もう生きる気力もなくなるほど落ち込む。だから、彼らはとにかく人に嫌われたくないという強い願望を抱いており、必死になって自分は嫌われていないと思い込もうとする。その限り、ここには自己欺瞞が渦巻くことになる。他人に嫌われたくないという願望が極端に強い人は、反省すべきであろう」（p 78）

私は、たった一人にでも嫌われたら、あるいは、この世界に自分を嫌っている人がいるかもしれないという事実だけで、どうしようもなく足がすくむ。ゆえに、「人に嫌われても立っていられる」というのは、私にとって「高み」である。個性や承認を求めなくてもすむ人は、私にとって「高み」である。そして、私は、そうした人を「高み」だと断ずる自分に愛着を感じている。こうした「自分であること」を誇れるということ（好きだということ）、このある種の優越感（自分のえこひいき）は、対話を阻むものである。かつ、誰のどんな言葉にも潜むものである。

「では、どうすればいいのか？努力を放棄するのか？そうではない。各人が自分自身の中に『自己満足に浸っている者』を、『高みから見下ろす者』をきちんと見据えることである。そして、『他人が見えなくなる瞬間』を警戒することである」（p 217）

対話をすることは、単に一部の人間に見られる傾向性でしかないため、対話は不可能であるように私には思える。しかし、大抵は傾向性だと思うのだが、それだけではない可能性があって欲しいとも思う。つまり、自らの優越感を見据えつつ（自分を偽らずに）、他人の話に耳を傾けて合意に向かおうとする姿勢の可能性である。そうした、経験に依存しない可能性は、どこに見出せばよいのか。